

《履修上の留意事項》 教員は、履修目標達成のために必要な援助を行うが、履修目標の達成は、グループ単位、個人単位の自律的な学習によって行われる。
発表担当のグループは全員で役割を決め、十分な予備学習に基づいた責任のある発表を行うように心がけること。発表グループだけでなく教室の全員が、初日に配布される履修の手引きを参照して、当日のテーマについて予習の上講義に臨むこと。
遠隔講義のみ実施。

《担当者名》○西澤典子 今井智子 太田 亨 中川賀嗣

【概 要】

医学における言語聴覚学の位置づけを知るために、医療の基本事項と医療倫理を、学生が主体的に調べ、知識を共有するために発表を行う。グループ単位でテーマを設定し、問題指向の参加型学習が主体となる。グループ学習と発表討論、講義、ロールプレイによる医療接遇、医療面接の学習が予定されている。

【学習目標】

医学における言語聴覚学の位置づけを、医療の基本事項と医療倫理の観点から説明できる。

1. チーム医療における適切な医療を行うための医療の基本が身についている。
2. 医療の基本となる事項を、事例をあげて説明できる。
3. 医療の基本となる事項に留意して、言語聴覚士としての対応を説明できる。
4. 医療面接の重要性を説明できる。

【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	オリエンテーション (学生参加型授業とは)	授業設定を理解する。 課題指向型グループ発表にむけて、全体を8グループに編成し、テーマを割り当てる。 グループごとに、役割を分担し、今後の学習の方針を立てる。 担当教員の指導の下に、学習の要点、キーワードを理解し、発表の枠組みを組み立てる。割り当てられた時間内に研究内容を過不足なく、わかりやすく発表するための方法論について講義で説明する。	西澤典子 今井智子 太田 亨 中川賀嗣
2	チーム医療 (グループ発表/討論)	医療行為および診療補助行為について理解する。 言語聴覚士が働く職場におけるチーム医療の必要性、チーム医療の形態、チームメンバーなどを理解し、チーム医療の実際を知る。	今井智子
3	リハビリテーション (グループ発表/討論)	リハビリテーションの定義、歴史、プロセスを確認する。ICFの考え方を理解し、リハビリテーションをICFの視点から考える。地域リハビリテーションの定義、位置づけ、具体的実践例について理解する。地域包括ケアシステムについても理解を深める。	今井智子
4	EBM (グループ発表/討論)	EBMの定義、歴史、必要性、利点・欠点についてまとめる。EBMを実践するために重要なポイントを理解する。 言語聴覚療法に関連する診療ガイドラインを紹介し、その作成過程に必要なエビデンスレベルを理解する。	太田 亨
5	公衆衛生 (グループ発表/討論)	疫学研究法(無作為比較試験、コホート研究、症例対照研究、横断研究)、疫学研究法の用語(バイアス、罹患率、相対危険度、寄与危険度)について理解する。 人口統計、死因・疾病・障害統計、母子・成人・高齢者・精神保健の現状と動向等について学ぶ。	中川賀嗣
6	健康管理 (グループ発表/討論)	母子保健・学校保健と感染症対策、産業保健等について学ぶ。	中川賀嗣
7	感染対策	病原微生物の種別と感染様式、これによって引き起こ	西澤典子

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
	(グループ発表/討論)	される代表的な疾患のまとめを作る。 消毒法の歴史を振り返り、現在行われている滅菌消毒法の概要とその適用を整理する。 院内感染の定義を確認し、病院における感染対策を、実例に基づいて組織的に確認する。	
8	医療面接 (講義/討議)	初診面接に重点を置き、接遇を含め、患者に配慮した情報収集のあり方と、医療契約の成立について、問題提起をする。	西澤典子

【評価方法】

定期試験相当のレポート80%、グループ単位の発表 20%

発表に必要な情報教育は履修済みとして、グループによる発表の構築を課す。

履修すべき事項は「履修の手引き」に詳細に記載されてある。履修目標の達成は、学生の主体的な学習による。教員は、目標達成のために援助を行う。すべての講義において、学生は発表を担当しているしていないにかかわらず、履修の手引きに記載された項目を自習し、発表を理解し、必要に応じて教員に質問をすること。

評価は、発表において学生がいかに労力を使ったかではなく、最終的に学習内容の理解がどの程度達成されたかによる。したがって、定期試験による評価に重点が置かれる。

【備 考】

参考書 : 酒井聡樹 著 「これから学会発表する若者のために」 共立出版 2008年
 斎藤清二 著 「はじめての医療面接—コミュニケーション技法とその学び方」 医学書院 2000年
 友安直子 編著 「プロに学ぶ患者接遇 患者心理に基づく実践のポイント80」 医学通信社 2002年

【学習の準備】

発表グループは少なくとも3週間前から指導担当教員と連絡をとり、発表の内容について指示を受けた上で、自主的に学習し、当日の発表を組み立てる。臨床家として言語聴覚士が働くために、必要かつ十分な情報を与えるように留意した発表を作る。

発表しない学生も課題に対して、予習を十分に行うとともに、発表における討議に積極的に参加できる準備をしておく。

予習復習合わせて160分以上。発表準備に当たっては、指導担当教員のもとにゼミ形式のアクティブラーニングが複数回行われる。発表に間に合わない場合は、5時限目以降の指導となることもあるので、教員と相談のうえ、事前に各自の予定を十分に調整すること。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

(DP3) 言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

西澤典子(医師)
 中川賀嗣(医師)
 今井智子(言語聴覚士)
 太田 亨(医師)

【実務経験を活かした教育内容】

医師、言語聴覚士として医療機関で言語聴覚障害専門の臨床家として実務した経験を活かし、多職種連携医療における適切な医療役割を果たすための基本的態度を教育する。